



# 福祉系対人援助職 養成の現場から

西川 友理

大学を卒業した後、社会福祉施設職員として働き、大学院で学び、時には福祉とは全く関係の無い仕事をしながらも、何らかのかたちで社会福祉士や介護福祉士などの養成の現場に携わってきました。当初それは生活の糧を得るためのものであり、興味の対象ではありませんでした。ところが、いつのまにやらこれが興味深く、たいへん面白いと感じるようになりました。

養成の現場には、ちょうど民法上の大人と子どもの境目である二十歳前後の学生が多い。また、いったん社会に出て働き、再び学生になった方々もいる。社会福祉専門職を目指し、成長していく学生たちに、養成という教育支援をする上で、気付いたこと、気付かされたことなどを私なりに書いていきます。

ちなみに、題名の“福祉系対人援助職”というのは、便宜上造った言葉で、社会福祉士や介護福祉士など、福祉に携わる専門職の事を指しています。他に、医師や看護師などの“医療系”、臨床心理士などの“心理系”等と分類できそうですが、細かくは考えていないので割愛。

また、養成の現場で教えている相手も、大学生や専門学校生、講座受講生と様々な立場ですが、この連載の中では、単純に“学生”、それぞれの養成の現場も“学校”とします。

## 「実習目標を立てる」

福祉系対人援助職養成の仕事に携わる前は、福祉職を目指そうというのだから、人と話すのが好きで、みんなでワイワイやるのが好きな学生たちばかりだろう、と考えていました。私自身を振り返ることもなく、まったくもって安易でした。

現実には、

「お母さんが行けと言ったから」

「あんまり勉強せんでもええかなと思ったから」という学生が少なくない。

「『あなたは優しいから』と周囲から言われたから」と、気弱で自己主張が苦手な学生もいる。

「資格取れるなら、なんでもいいから取っとこうと思って」となんとなく入学してきた学生もいる。

そんな学生たちも、どの学生も、福祉職の資格取得のためには、問答無用で“実習”に突入します。

実習前教育では、まず、学生たちを受け入れて下さる実習先施設・機関などについて調べさせ、それぞれに必要な基礎的な福祉の知識を復習し、確実に習得するよう指導します。

また、敬語の使い方、電話での応答の仕方や文章の書き方など、社会人としての最低限のマナーも教える必要があります。実習前の学生たちには、やるのがそれこそ山のようにあるのです。

実習前教育は、学生たちがじわじわと「こいつはえらい所に来てしまった...。」と責任を感じ、自覚していく期間でもあるのです。

実習前教育において、個人的に最も重視するもの

が、学生自身が設定する“実習目標”です。学生自身が何を目標とするのか、徹底的に考えるように、と指導します。

考えるためには、実習先がどのような所で、何が出来て、何をすればイケナイのか、どのような役割を期待されているのか、これらをしっかりと把握する必要があります。

そして、何が得られれば目標達成とするのか、学生自身でゴールを設定します。

おそらく、高校を卒業してすぐに大学や専門学校に進学してきた学生たちにとって、このような事を意識的に考える経験は、それほど無かったのでしょう。あまり主体的ではない学生はここで大きく苦労します。

実習目標の設定用紙をテキストに書いて出してくる学生に、「やり直し！」と言い、その都度、個別指導をする。

3～4回のやり直しは当たり前、学生によっては6～7回考え直すように指導することもあります。

たまに不思議なことが起こる。

1～2回目のやり直しに、「ええ...また？」と肩を落としていた学生が、回を重ねる度に、「やったろやないか」と目の色が変わり、やたらと意欲的になる輩がいる。それはただ単に悔しくて意地になって頑張っているだけではない。

自分がどんな人間か、ある社会集団の中に自分をどう位置づけるか、それを深く洞察しなければならないのです。つまり、今まで見えていなかった施設・機関という社会（公）と自分（私）との関係性が見えてくるからではないでしょうか。

小手先の誤魔化しは通用しない事を自覚したのでしょう。

実習目標を設定する際、どんな学生でも、必ず頑張らなければならない時期があります。解らない、出来ないと嘆く学生は、その出来なさに正面から対峙せざるを得ない時期が来るのです。それは今までの自分を振り返るための機会としても、福祉系対人援助職の養成にも欠かせない、有益な時なのです。

“実習目標を立てる”ということは、そう遠くない将来に社会人となる学生たちが、自身のビジョンを描く手助けにもなるのでしょうか。

## 「刮目して待つ」

現在は5月。夏からの実習に向かって、学生たちが自分自身への探求を始める時期。これを乗り越えようとした学生は、なかなかの面構えで実習に向かうことが出来るように思います。

梅雨時のジメジメとした大気とは裏腹に、学生たちの面構えが変わっていくのを見ることは、喜ばしいことであり、私の密かな楽しみにもなっているのです。

